世界一のマンモス校　上海日本人学校

前上海日本人学校浦東校　教頭
香川県観音寺市立伊吹小・中学校　教頭　合　田　芳　弘

キーワード：管理運営上の諸問題，教育課程の工夫，派遣教員の減少

１．在外教育施設の現況等

(1) 児童生徒の推移

私が赴任したH22からの３年間で約500名増加した。ただ，昨年の９月，尖閣諸島の国有化を発端に発生した大規模な半日デモ，帰国直前に話題となった大気汚染（pm2.5），そして，鳥インフルエンザの発症等の影響からか，今年度の児童生徒数は，横ばい状態である。(2013年４月現在，小805人・中702人　　計1,507名)。

※上海日本人学校は，虹橋校，浦東校，高等部の３校から成り立っており，全児童・生徒数は約3,200人。日本人学校としては，世界最大規模である。

(2) 教育指導等の創意工夫

教育はサービスではなく保障である。９年間の学びの保障をどうするのか？ 日常は授業の連続で構成されている。そのために，授業の改善を課題とし，「学びの共同体」を軸とした学校運営をおこなった。

・全教職員（69名）が１年に最低１回は授業を公開し，研究協議を行う。児童生徒の変容について意見を出し合い，教師の力量については議論しないのが原則。
・授業は「活動的で，共同的で，表現的な」授業に心掛ける。
・一昨年には，日本より佐藤学氏（現学習院大学教授）を講師として招き，指導・助言，講演をおこなった。
・華東師範大学の沈副教授と連携し，上海市内で学びの共同体を推進している上海市内の子長学校と職員同士の交流を行った。

２．在外教育施設の管理運営上の諸問題等

(1) 児童生徒の増加と文科省派遣教員の減少

児童生徒の急激な増加の中で，即戦力となる教員の確保が管理職の大きな仕事となっている。昨年度は日本人の全教職員69名中，39名が文科省派遣，30名が現地採用・財団採用であった。教員の確保は学校独自募集と海外子女教育財団の専任教諭採用システムを併用して行ったが，昨今の中国情勢の悪化，大気汚染，鳥インフルエンザの発症等により，辞退するケースも他の日本人学校ではあったと聞いている。

国や各都道府県の事情による文科省派遣教員の減少は，日本人学校においては致命的な痛手である。

(2) 高等部と同一敷地内にあるための諸問題

小，中学部と同じ敷地内にあるため，児童生徒数の増加のために使うべき教室が確保できず，運動場や特別教室をシェアすることで問題が起きている。そこで今年度は第３期の校舎増築を行っている。

(3) 危機管理についての問題

一昨年，体育の授業中に中２の男子生徒が倒れ，亡くなるという痛ましい事故が発生した。中国では救急車を呼んでもすぐには到着しない。30分以上待つ場合もあり，しかも有料。AEDを一般人が動作させることは禁じられ，医者がスイッチを押すことになっている。そもそもAEDによる救命処置は５分以内に救急車が来ることを前提に行われるものである。そこで２台の日本製AEDを設置し学校に隣接している日本人経営のクリニックに連携

を求め，通報後，5分以内に医師を派遣してもらうシステムを構築した。

(4) 特別支援が必要な児童生徒の受け入れについて

これまで特別支援教室への入級申し込みが年間数十件はある。本校では，比較的軽度な発達障害を持つ子どもたちを受け入れている。専門的な知識を持つ教諭がいないこと，周辺に連携できる専門機関がないこと，日本語が理解できる専門医がいないこと等が背景にあって，簡単に重度の児童生徒を受け入れることはできない。

3．上海日本人学校の実践（教育課程）

校訓……独　歩　博　愛
学校教育目標　自ら学び　明るく　やさしく　たくましく，国際性豊かな児童生徒の育成

1. 学力の向上　2. 国際理解教育　3. 小・中併設に重点を置いた教育課程の編成。

(1) 学力の向上

・小学部の教科担任制（音楽・図工：小1～6，理科：小3～6）
・きめ細かな指導：中学部数学・英語の少人数指導
・基礎基本を定着させるドリル学習…（小　ドラゴンタイム　中　マルチタイム）
・本に親しむ時間　全校一斉の「朝読書」の時間

(2) 国際理解教育

国や言葉を越えた交流をめざして　～一人ひとりが日中の架け橋に～

上海日本人学校の教育目標は「自ら学び　明るく　やさしく　たくましく，国際性豊かな児童生徒の育成」であり，開校以来，国際理解教育に重点が置かれている。

学校経営方針に「在中国・上海の特性を生かし，中国や上海の環境や人材を学習活動に取り入れ，現地校や国際学校との交流を通し，中国理解や人間理解，自国・自己理解を深め，共生の精神と国際性豊かな児童生徒の育成を図る」と強く打ち出し，特色ある教育活動の目玉にしている。

① 語学授業（英会話＆中国語）

小1～中3の子どもたちは，中国人と欧米人の講師から，クラスごとに少人数の習熟度別（会話能力）グループで，週1回，本校作成の教科書（中国語）で英会話＆中国語を学んでいる。

② 現地校交流

上海日本人学校では開校以来，現地小・中学校との交流がある。「人と人のふれあい」を通した交流が世界に目を向け，グローバルな視点で物事を考えることができる児童生徒の育成につながっている。また，現地校との交流では，身近な遊びや歌を通して，日中の文化の類似点や相違点に気づかせ，同時に日本と中国との様々なつながりから，よりよい国際関係を考え，深めている。

小1～中3の全学年が，現地校9校と発達段階に即しての交流活動を実施し，各学年，年に1～2回，2学期を中心に有意義な交流活動（訪問・招待）を実施している。ただ，昨年度は日中関係の悪化より，実施できたのは小学部5年生だけであった。非常に残念である。

③ 中日スピーチ大会

中学部中日スピーチ大会は日本人学校主催で，4～5校の現地中学生を招待して行う伝統的な行事の一つである。日中の生徒が互いに相手の言語で意見発表を行い，日頃の練習成果を披露する絶好の場であると共に，互いの文化や歴史への理解を深める機会でもある。スピーチに合わせた中国語（日本語）の字幕，閉幕式での中学部全員の中国語による合唱や在上海日本国総領事館のご講評等，内外から高い評価を得ている。

④ 中国大陸を歩く！　宿泊学習＆修学旅行

本校では，今昔の人々の暮らしや芸術，地理，気候風土に直接触れ，歴史・文化の息吹を求める「百聞は一見にしかず」の中国国内旅行を実施している。

・小学5年生　1泊2日による，上海市内の「東方緑舟」での宿泊学習

・小学6年生　2泊3日による，北京への修学旅行。Pm2.5の影響により，北京へ行くことに抵抗のある保護者もいる。

・中学1年生　2泊3日による，紹興・杭州への宿泊学習。

・中学2年生　2泊3日による，無錫・蘇州への宿泊学習。平成22年までは，南京へ行っていた。しかし，南京虐殺記念館へ行くことに躊躇される中華系の保護者がおり，23年度より，行き先が変更になった。

・中学3年生　平成23年度までは，3泊4日で西安と敦煌へ行っていた。しかし，生徒数の増加により西安・敦煌間の航空機が物理的に乗り切れることができず，平成24年度は2泊3日で四川省の成都へ行った。25年度も成都の予定であったが地震が発生し，西安へ行くことになった。

その他，小1～小4は，上海市内の動物園，植物園，水族館等，校外学習で校外へ出る機会が，年に2～3回はある。

⑤ 中国の芸術・文化鑑賞　～チャレンジタイム（PTA主催）～

PTA活動のひとつに子どもたちに「中国の音楽や文化，芸術を鑑賞・体験してもらおう」という活動があり，小学部は低学年・中学年・高学年，そして，中学部と4つの年齢差に分けて開催している。

・上海雑伎　・二胡などの中国楽器　・京劇鑑賞　など

⑥ 教職員の研修（現地校訪問と本校招待）

在外にいるという機会を利用し，本校教員は地元の小学校や中学校を訪問し，授業参観や意見交換や質疑応答を行っている。ここ数年，上海市政府は国際教育を前面に押し出した教育政策を進めている。現地の学校事情や教員の価値観，さらには中国の人々の生活習慣や考え方まで，幅広く理解することができる教職員交流になっている。

(3) 小・中併設の利点を生かした教育指導

① 小・中合同の学校行事（入学式と運動会）

年齢差を超えた縦のつながりは人間形成の上で大切である。しかし，児童生徒数の増加により，平成25年度からは入学式も運動会も小学部と中学部が別々に開催となった。

② 6年生の中学部授業・部活動の見学　③ 募金活動等の児童会と生徒会のタイアップ　④読み聞かせ

⑤ 漢検・英検の共同実施　⑥ 放送委員会等の活動。

４．今後の在外教育施設における教育指導のあり方について

日本人学校は海外に赴任される時に，子どもたちが日本と同じように学習できるように，そして，帰国時に編入・進学等がスムーズにできるように，日本と同じ教育を求めて設立されたものである。しかし，日本の公立学校とは明らかに違う点がある。それは子どもたちの国籍や出身地域も，保護者の職業も考え方，価値観も多様であるという点である。子どもたちは長い者で９年間以上，短い者でも数ヶ月の海外生活を送っている。日本で生活をしたこともない子どももいる。このように多感な思春期にいる子どもたちにとって，日本人としてのアイデンティティの確立は大きな問題である。児童・生徒の中には，学びから逃避する者，情緒不安定になって倫理観を見失う者など，反社会的，非社会的な行動をとる子どもたちも少なからずいる。そのことは，子どもたちは多くのストレスを抱えて，学校生活を送っている現れではないだろうか。

３年間の日本人学校での勤務において，管理職として私が経験した一番大切なことは，特に教師は子どもたちと寄り添い，人間関係を軸として進める学校改革の必要性を体得したことである。そのためにも優秀な教員の確保は緊急の課題である。国際理解教育，異文化理解に理解のある教員を，各日本人学校に派遣していただきたいことを切に願う。

2013年３月21日，帰国した翌日が，人事異動の発表であった。
新しい勤務校は，瀬戸内海に浮かぶ「伊吹島」。
1,500人の超大規模校から児童・生徒数20人の小規模のへき地校（２級）へ。
夕日を見ながら，遠き中国・上海に想いを寄せる毎日である。　　以上